

ファン・ゴッホと日本 ーゴッホ研究の新たな可能性

天野知香*

今回のシンポジウムは、尾本圭子フランス・ギメ美術館長付顧問によって2009年に出版された『ガシェ家芳名録』の資料的意義をめぐる発表を中心に、日本におけるゴッホ研究の現状を担う諸研究者による発表を加えて、日本とゴッホの歴史的な関係の特質をめぐる議論が展開された。ゴッホと日本をめぐる関係は、ゴッホ自身による浮世絵をはじめとする日本に対する強い関心の一方で、日本の芸術家、文学者によっていち早くはじまり、かつ継続して展開されたゴッホに対する敬愛や憧憬という、ある意味では相互的とも言える関係の特徴としている。本シンポジウムはこうしたゴッホと日本の関係に焦点をあて、双方の視点からゴッホと日本のかかわりの特質を複合的に捉えるものであった。

ゴッホがその最後を過ごした地でもあったオーヴェール・シュール・オワーズのガシェ家は、まだゴッホの作品が公的な美術館にほとんど収蔵されていなかった時期、その作品に触れることのできる重要な場所として、またゴッホを崇拝する者たちのいわば巡礼の地として、重要な意味を持っていた。尾本圭子は、このガシェ家を訪れた日本人の芳名録という、ギメ美術館に収蔵されていた貴重な資料を見だし、その内容を詳細に分析し、ガシェ家を訪れた芸術家や文化人達それぞれを調査し、その傾向や歴史的展開を同時代の日本の状況に照らして明らかにした。3冊の芳名録は1922年（大正11年）から1939年（昭和14年）にわた

り記載されたもので、二人のフランス人を含み約245名の日本人による署名が残されている。署名者は日本画家を含む画家、彫刻家に加えて美術史家や文学者、音楽家に及び、独立美術協会や春陽会系の美術家から抽象画家まで、同時代の日本の美術界を反映した幅広い範囲に及んでおり、個々の美術家や作家、研究者自身のゴッホの影響や関心のみならず、日本におけるゴッホ受容を考える上でも重要な資料となっている。

この貴重な資料の分析を受けて、木下長広元横浜国立大学教授の発表は、これまでのジャポニスム研究を踏まえた上で、ゴッホが浮世絵から学んだ特質に関する新たな視点が提示された。版画としての印刷物である浮世絵を通して、それを油彩画で描く事の意味や模写における変奏ともいえるあり方、いわゆる背景の独立や筆致の問題、別刷りにおける色彩の意味を考察する事に加え、とりわけ木下が「草の絵の系譜」と呼ぶ、ゴッホの作品の通常あまり注目されない傾向に着目する事によって、ゴッホの日本理解をめぐる考察がゴッホ芸術自体を新しい視点から捉えることへとつながる刺激的な発表がなされた。

続いて田中淳東京文化財研究所企画情報部長からは、日本のゴッホ受容の初期にあたる1912年を中心にした状況が具体的に語られた。『白樺』を中心とした複製による作品受容の特質に加え、とりわけ萬鉄五郎の『裸体美人』を中心とした受容の状況、さらには中川一政の場合が論じられた。萬がルイス・ハインドなどの海外資料に触れることのできた環境や、制作における萬自身による写

*お茶の水女子大学大学院教授

真の利用など、具体的な資料に基づく興味深い事実が明らかにされた。

稲賀繁国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授は宮沢賢治を取り上げる事で、文学の領域におけるゴッホとの関わりを俎上にあげ、糸杉のイメージや自己犠牲による世界の幸福と言った観念を巡り、賢治とゴッホの精神的な関わりとも言ふべき問題について踏み込んだ考察がなされた。

日本におけるゴッホ研究の第一人者である圀府寺司大阪大学大学院教授は、1972年に亡くなった美術家大石輝一がゴッホに対する記念碑として、アルルになぞらえた兵庫県三田市に作り上げた「アート・ガーデン」について、オランダ総領事や兵庫県知事まで出席した盛大なゴッホの記念碑の除幕式から、今日の忘れられた現状までを紹介し、現代においても継続する日本におけるゴッホ受容の知られざる一面を明らかにした。『芳名録』が明らかにしたように、ガシエ家がかつてゴッホに憧れる者たちの名実ともに巡礼の地であったのに対して、「アート・ガーデン」は、実際にはそれとして機能する要件をもたなかったにもかかわらず、現代において、彼に憧れる日本人によって新たに作られた巡礼の地としての意味を付与されたと言えるだろう。

本シンポジウム企画者のロール・シュワルツ＝アレナレス本学大学院准教授による趣旨説明を以て行われた、これらの充実した発表をもとに、最後に発表者全員が参加して、会場の質問を交えたパネルディスカッションが行われた。会場からの発言が適切に指摘したように、ゴッホと日本との関係はゴッホ自身の日本への深い関心によって、相互的にも見える特徴を有している。圀府寺が述べたように、ゴッホの生地であるオランダにおいても、書簡集や伝記の出版を通して「人間ゴッホ」への関心が高まる事でその名声がひろまった事を考えれば、日本においてこれに先立つ1910年代はじめに『白樺』によっていち早く盛んになり、

両大戦間のガシエ家「芳名録」へとつながるゴッホ熱とも言うべきものは、特筆すべきものである。そしてそれが『白樺』的な人間観に基づく人間ゴッホの魅力を優先させたものであったとしても、田中が示した通り、複製を通してであれ、萬をはじめとする近代絵画の画家たちが革新的な表現方法を開拓するにあたって重要な示唆の一つとなっていたこともまた疑いない。稲賀の示した文学や思想の領域へと展開するゴッホ受容は、ゴッホという画家の特異なあり方をあらためて考えさせるとともに、ゴッホ自身の日本受容における自然観や宗教的な芸術家観と絡み合う。ゴッホの日本への関心はまた、木下が示した通り、自身の芸術の模索において、それまでの西洋絵画にはない新たな要素を引き出す要因となり、19世紀末における西欧の造形的問題をあらためて捉え直す契機を示唆した。ゴッホ受容をめぐる神話化聖人化の物語の一方で、複製や実際の作品に触れることによる個々の受容の具体的なあり方や相互的な参照は、それぞれの時代を通して近代絵画の歴史における多様な問題と結びつく。

発表者に対する会場からの個別の質問に加え、こうしたゴッホ受容の特質をめぐり交わされた活発な議論は、ゴッホと日本の複合的な関係のみならず、近代絵画史におけるゴッホの多様で新たな側面をも浮き彫りにしながら、展開された。一見すでに語り尽くされたかにみえるゴッホであるが、パネルディスカッションの議論の中でも、個々の資料や作品の詳細な実証的検討を通して、ゴッホの多様な側面や受容をさらに広範で国際的な近代美術史の問題と関連付けて論じるといふ、ゴッホ研究の豊かな可能性が示された。その意味で本シンポジウムは、日本学研究と言う枠組みを文字通り国際的な比較研究に開くことの有効性を示すと同時に、今後のゴッホ研究を方向づけることへと貢献する重要な契機となったといえるだろう。